

日本語とインドネシア語との
バイリンガル・E・マガジンE-Magazine Dwi Bahasa antara
Bahasa Indonesia dan Bahasa Jepang**こむにかし**
KOMUNIKASI**Mei 2025 No.230****【2】日伊比較文化考**Perbandingan budaya
antara Indonesia Jepang

- 対処療法それとも根本治療

Mengatasi secara sementara

atau mengatashi dari dasar -

【3-9】ガドガド GADO-GADO

- 日本語教育改革プロジェクト

Proyek Revolusi

Pembelajaran Bahasa Jepang -

【10】新ユートピア Dunia Impian

- ユートピア (68) 隣組と町内会

Dunia impian (68) RT dan RW -

【11】Let's Positiv Thinking

- 腑に落ちる Masuk Akal -

12-13】帰らなかった日本兵

Tentara Jepang yang

tidak pulang ke negaranya

- 母 (2) Ibu (2) -

【14】松下幸之助の言葉

Kata-kata Matsushita Konosuke

逆境をチャンスに変える言葉 7

Kata-kata yang merubah

kesulitan (pinch) ke kesempatan (Chance) 7

【15-17】宮澤賢治の童話から

Dari Dongeng Miyazawa Kenji

- 山男の四月 (2)

Bulan April laki-laki gunung (2) -

【17】編集後記 Dari Redaksi**【18-20】広告 Iklan****【21-22】ISSI が目指すもの Visi Misi ISSI**毎月 8,000 名以上の方に日本企業で働く方々を中心に、
「こむにかしIJ」発行について
メールで案内をお送りしています。
Setiap bulan mengirim informasi mengenai
"Komunikasi IJ" melalui e-mail
terhadap lebih dari 8.000 orang.
Sebagian besar adalah orang-orang
yang bekerja di perusahaan Jepang yang ada di Indonesia.

**日イ比較文化考 Perbandingan budaya antara Indonesia Jepang**

職場における日本人上司とインドネシア人との意見の食い違い。その食い違いの原因をインドネシアと日本との文化の違いに求める人が多いようです。果たしてそうでしょうか。ここでは、問題になりそうなインドネシアと日本の文化、考え方の違いを私なりに考えてみようと思います。

Perbedaan tanggapan antara orang Indonesia dan atasan orang Jepang. Banyak orang menganggap karena perbedaan budaya antara Indonesia dan Jepang. Apakah memang begitu? Di sini saya mencoba memikirkan perbedaan budaya dan cara berpikir yang akan menjadi masalah antara Indonesia dan Jepang.

対処療法それとも根本治療

インドネシアにいて気になることの一つに道路の修繕があります。高速道路でも一般道でも頻繁に道路の修繕をしているために起こる渋滞によく遭います。インドネシアの場合、セメントをベースにした道路が多いようです。そこでそのセメントを下の部分から掘り起こして修繕する場合はほとんどようです。当然ながら、一回の修繕でかなりの時間がかかります。

おそらく地盤が元々弱いという点、そして雨が多いので雨による侵食が多いという点があるのではないかと思います。その地盤の改良や水はけを良くするという部分が真の解決になると思うのですが、実際、そのように解決している部分はあるのでしょうか。

道路だけでなく、屋根の雨漏りなど、根本的な原因に対処するのではなく、その場限りの対処療養が多いように感じます。

対処療養と根本治療の大きな違いはなんでしょう。それはどれだけ深く考えるかどうかにあると思います。工場では「なぜを5回考えよ」ということがよく言われます。「なぜAになるのか?」「Bだから」「なぜBなのか?」「Cだから」といった問いを5回繰り返せということです。5回とは単なる比喩であって、真意は「根本の原因、真の原因」に辿り着くまでとことん考えろということです。

そのように真の原因を追求することを習慣づけるで、人間としての能力が高まっていくのではないのでしょうか。本当に天国に行きたいのであれば、真の原因を追求することを習慣づけることで人間としての能力を高めることが、一つの確実な道であると思います。皆さんはどうお考えですか。

Mengatasi secara sementara atau mengatasi dari dasar

Salah satu situasi yang memperhatikan di Indonesia adalah perbaikan jalan. Baik jalan tol walaupun jalan biasa, sering mengalami kemacetan yang disebabkan perbaikan jalan. Kalau di Indonesia kelihatannya banyak jalan buatan beton. Oleh karena itu, kebanyakan perbaikan jalan dilakukan dengan cara bongkar beton dari dasar. Tentu saja untuk perbaikan jalan butuh waktu agak lama.

Mungkin karena ada poin dasar bahwa tanahnya labil, dan karena banyak hujan, gampang rusak karena air hujan. Menurut saya memperbaiki kondisi tanah dasar dan memperbaiki pengaliran air hujan (drainasi). Namun secara nyata, apakah diatasi berdasarkan hal-hal seperti itu?

Bukan hanya masalah jalan saja, kelihatannya banyak hal diatasi secara sementara saja, seperti mengatasi kebocoran air hujan di bangunan.

Perbedaan besar antara “mengatasi secara sementara” dan “mengatasi dari dasar” itu apa? Menurut saya itu adalah apakah memikirkan sampai dalam atau tidak. Kalau di pabrik sering dikatakan “Mengulangi ‘kenapa’ sebanyak 5 kali”. “Kenapa menjadi A?” “Karena B.” “Kenapa menjadi B?” “Karena C”. Maksudnya seperti itu mengulangi “kenapa” sebanyak 5 kali.” Kata “5 kali” hanya perumpamaan saja. Sebenarnya memikirkan benar-benar sampai bisa dapat penyebab dasar / penyebab utama.

Dengan membiasakan mencari penyebab utama, bukankah bisa meningkatkan kemampuan sebagai manusia? Jika betul-betul mau masuk surga, menurut saya jalan yang paling pasti adalah meningkatkan kemampuan sebagai manusia dengan membiasakan mencari penyebab utama. Bagaimana pendapat anda?

**ガドガド GADO-GADO**

私が常日頃考えている様々なことを毎月ご紹介いたします。
Mengenalkan setiap bulan, apa yang saya memikirkan sehari-hari.

日本語教育改革プロジェクト

私は1987年10月23日にインドネシアに来てすぐ友人を通し日本語を教えてほしいと頼まれました。最初に教えたのはジャカルタにある日本語の塾でした。その後、インドネシア大学やダルマプルサダ大学などでも教えました。当時、日本語を教える際に使われていたのは、日本語初歩という教科書でした。それを使って教えていたのですが、文法事項があっちへ行ったりこっちへ行ったりとても教えづらく教えていても面白くありませんでした。

中学生の時、私はNHKラジオの基礎英語と続基礎英語で英語を勉強しました。中学校で使われていた教科書に沿った、文法をベースにした段階的なカリキュラムでした。それに加え、置き換え練習や役割練習など毎日の勉強が楽しく、おかげさまで中学校卒業時点では学校の英語の先生が「奥君にどのように英語を教えたら良いのかわからない」と私の前で涙をこぼすくらいでした。(本当はその時点で私が好きだったカーペンターズの歌の歌詞を訳させたり、面白そうな英語の物語を読ませたりしただけで私の英語の能力はもっと上がったと思うのですが。)というわけで、私はその時点で英語に関して天狗になってしまいました。ちなみにその頃、英語検定試験(英検)の4級を受けたのですが、試験当日頭が痛くなって、その試験には合格していません。

高校ではクラブ活動が忙しく、学校の英語の授業のための予習復習をほとんどしませんでした。おまけに英語の会話の方に興味を持ってしまったため、英語の読み書きをほとんどしていませんでした。大学は中学校の英語の先生になりたかったので英文科を受けました。でも英語の点数が低かったため、同じ文学部にあった社会学科に補欠で合格しました。ですから、英語に関して今だにコンプレックスを持っています。語学教育に関してそのような背景を持っています。

私は勉強するのが好きです。そして、教えるのも好きです。だからこそ教えづらい教科書で日本語を教えるのは耐えられませんでした。結局自分で教科書を作り始めました。

1991年にインドネシア大学からジョクジャカルタのガジャマダ大学に籍を移しました。ジャワ語を勉強したかったからです。ちょうどその時、インドネシア大学の日本語学科にガジャマダ大学から「新しく日本語学科を設立したのでインドネシア大学から日本語の先生を派遣してほしい」との手紙が来ました。親しくしていたインドネシア大学の日本語学科の先生が私に「奥さんを日本語教師として推薦します」とガジャマダ大学の日本語課宛に推薦状を書いてくれました。その手紙を持ってガジャマダ大学の日本語学科に行ってみました。するとそこで教えていたインドネシア人の先生はバンドンのパジャジャラン大学出身の日本語学科の先生で親しくしている友達でした。私と日本語を教えることができるということで喜んでくれました。

その後、その友達に誘われてガジャマダ大学の日本語学科に行きました。ちょうど日本の国際交流基金からきた日本人の先生と授業の前の準備(教案)について話していました。「今日は何を教えますか。」「行く」と「来る」について教えます。」「どのように教えますか。。。」なんとインドネシア語を介さない直接教授法で教えていたのです。そのことはパジャジャラン大学の日本語学科の友達からも聞いていました。「○○じゃないんじゃない」という言い回しに関して、インドネシア語ができない日本語の先生と一週間悩んだそうです。私がインドネシア語で説明すると、ほんの数秒で「なんだ、そんなことか、一週間も悩んで損をした」ということでした。そんなこともあって、いまだに直接教授法については大きな疑問を抱いています。私は「日本に来た国籍の違う、違う母国語を持った人がいる一つの教室で教えるための苦し紛れの教え方である」と理解しています。

インドネシアでは大学の日本語学科で4年勉強しても、日本語能力試験の3級(今のN4)に合格できるかできないかぐらいです。3級というと日本の小学校3年程度の日本語能力です。大学を卒業してもそのぐらいの能力しか得ることができません。とても悲しいことです。卒業生はそれでも仕事を探さなければなりません。それで、卒業生の多くはまだ日本語教育を行っていない大学や高校に掛け合い、日本語のクラスを新設し、日本語教師として就職するわけです。ですから、自



分が勉強した教科書でしか教えることができません。現在はほとんど「みんなの日本語」です。3級の能力の人間が教えるわけですから生徒はそれ以上の能力は望めません。インドネシアでは日本語の学習人口が世界でもずば抜けて高いと言われていますが、そのような背景があります。

以前、タイ人の日本語のできる人と一緒に仕事をしたことがあります。日本語で仕事をする上で全く問題のない日本語の能力です。彼女に「タイの大学で日本語学科を卒業すると日本語の能力はどのくらいですか」と質問しました。答えは、ほとんど1級か2級だということです。「どんな教科書を使っていたか」と質問すると、彼女はキョトンとしていました。私が「インドネシアでは『日本語基礎』などを使っています」と言うと、「ああ、そう言うことですか。それは高校の教科書です」と返ってきました。それはそうですね。例えば日本の大学でインドネシア語を勉強する際、最初は教科書のようなものを使うかもしれませんが、大学ではインドネシア語の新聞や雑誌、小説などが教材になりますよね。私はインドネシアにおける日本語教育の状況に悲しくなりました。

さて、私のジョクジャカルタ時代に話を戻しましょう。1991年頃の話です。結局私は本格的に日本語の教科書の制作に取り掛かりました。中部ジャワのウォノギリで知り合った高卒の女の子が三人私のところに来てくれたので、その子たちに日本語を教え始めました。ちなみにそのうちの一人は今の私の女房です。そして、その子たちに教えながら、教科書を作りました。ベースにしたのは、日本の中学校2年の国語の教科書です。そこには日本語の文法事項がコンパクトにまとめられています。「体言」「用言」「終止形」「連体形」「連用形」など覚えのある方も多いのではないのでしょうか。それと「て・に・を・は」を段階的に教えるカリキュラムを組み立てました。その組み立ての中で、ひらがな、カタカナ、小学校3年までの漢字を順番に勉強できるようにしました。ちょうどジョクジャカルタで日本語を学びたいと言う女性がいたので彼女を加えて一つのクラスを作りました。週4日で毎日午後1時ぐらいから2時半までだったと思います。それで、私は午前中にその日教える課の教材を作り、お昼過ぎに教えて、その後つぎの日の課の教材を作るという作業を続けました。

各巻は7つの課から成り立っているのです。二週間で1つの巻が出来上がるという感じでした。ちなみに第一巻は名詞とひらがなです。その課で使う単語からひらがなを勉強します。第一課は「だれのせんせい。せんせいのいえ。」という文章です。そのひらがなを使うと「のだせんせいのえ」など意外と多くの文章を作ることができます。そのように各課ごとにひらがなを増やし、7つの課で「を」以外のすべてのひらがなを習得することができ、最終的に「○○の○○は○○の○○です。」という言い回しができるようになります。

第二巻は「する」の活用です。日本語の文法の中で難しいのは一般動詞の活用なので、それを後回しにして「する」の活用を勉強しながら「て・に・を・は」とカタカナ、そして小学校1年の漢字を習得することができます。第三巻は形容詞と形容動詞、連体形、連用形などの説明と練習です。そして第四巻で初めて一般動詞の活用の練習をします。基本的な動詞の使い方は第二巻で練習しているので、第四巻では一般動詞の活用に集中して練習することができます。第五巻は「れる・られる」などの助動詞の説明と練習。第六巻は当時3級の試験に出ていたが、第五巻までに網羅されていない事項をまとめ、小学校3年までの漢字を全て練習できるようにしたものです。

日本語は世界でも有数の優しい言語である。というのが私の持論です。日本語を難しいと思わせているのは語彙の多さです。その語彙を増やすためにひらがな、カタカナ、漢字が必要となる。だから、世界中のほとんどの人（日本人も含めて）は語彙の多さだけを見て日本語は難しいと勘違いしているのだと私は思っています。

ちなみに、第二次世界大戦でインドネシアに日本の軍政府が置かれていた時に日本語をインドネシア人に教えるために作った教科書があります。私はその教科書の復刻版を出版しました。そこではたったの12課だけで日本語の基本文法を説明しています。日本語の文法はそのように簡単なものなのです。

私は私の作ったこのシステムをBJシステムと名付けました。インドネシア語のBahasa Jepang(日本語)からとったものです。また、私のインドネシア名をBejo(幸運という意味があります)というのでそれとも関連づけました。私の女房はこのシステムで三ヶ月ほど勉強しました。その後結婚してジャカルタやインドネシア大学の近くのデポックという町に住みました。その当時、国際交流基金が主催する日本語中級コースがありました。そのコースに入るには試験を受けなければなりません。その試験はレベルで言うと3級ぐらいだったと思います。なんと女房はその試験に合格し、



そのコースで勉強することができました。そのコースの同じクラスの友達はインドネシア大学の日本語学科の2年生とか3年生生ぐらいだったそうです。つまり、BJシステムで三ヶ月で勉強した内容は大学の1、2年で勉強した内容に匹敵するということになります。それで私は自信を持ち、自分で「文化塾」と言う日本語学校を立ち上げました。そのまま、インドネシアの日本語水準をタイなみに引き上げることができるのではないかと期待を持っていました。しかし、世の中はそんなに甘くはありませんでした。

まず、ダルマプルサダ大学でBJシステムを使いました。試験ではカンニングができないように十種類ぐらいの試験問題を作ったりしました。その結果、私の授業のせいで卒業できない学生が続出しました。最終的に長期休暇の時、私以外の先生が特別クラスで私の授業を受け持ち、全員卒業させてしまいました。その時点で大学での日本語教育の改革をあきらめてしまいました。同時期に労働許可の問題が発生したり、日本の会社から社長付きの通訳の依頼があったこともありました。

その後、自分で今の会社を立ち上げ、会社としてBJシステムを広める努力をしました。そして、BJシステムで学んだ人たちが読めるように、日本語とインドネシア語のバイリンガルマガジン「こむにかしIJ」を作ったり、それを元にした書籍を出版したりしています。

ところが次の障害が明らかになりました。BJシステムを使って教えることができる先生が育たないのです。先ほども書いたように、インドネシアで日本語を勉強した人はほとんど「みんなの日本語」でしか勉強したことがないからです。私はできるだけ自分で教えていましたが、それが過労につながり、心疾患になり、自宅療養になりました。自宅療養中もオンラインでしばらく教えていましたが、やはり体力的に厳しくなりました。

コロナの時期、時間があつたので、自分でビデオを作成しましたが、できたのは第一巻まででした。そこでしばらくオンラインで第二巻以降を教え、それをビデオに撮り、YouTubeに載せることができなかと考えていました。でもなかなかその機会がありません。そして、今回、それなら、一般向けのオンライン講座を立ち上げればと思い、実行に移すことにしました。文法事項のみに絞ったもので、自分の体力も考え、週に1回の8回コースにしました。

このコースが終わり、全てをYouTubeにアップすることができれば、私がいなくなってもいつでもどこでも誰でもBJシステムで日本語の基礎文法が勉強することができるようになります。この基礎文法を習得すれば、先生なしでも「みんなの日本語」の練習をすることができます。ちなみに第四巻まで習得すれば、「みんなの日本語Ⅰ」、第五巻まで習得すれば「みんなの日本語Ⅱ」の文法事項は全て網羅されます。今回のコースは第四巻までですが、終了後第五巻のコースも開催予定です。その後については、「介護の日本語」による中級のオンライン教材も用意してあります。しかし、どのような言語であれ、読むことが能力を高める唯一の道です。そのためにバイリンガルマガジン「こむにかしIJ」を毎月発行しています。

このコースが終わり、一通りYouTubeへのアップロードが完了したら、オンラインによる試験を行う予定です。試験は各巻もしくは各巻を2つに分けて行います。そして試験に合格した方には合格証書を発行します。

現在、技能実習生や特定技能などで日本で働きたい場合、日本の受け入れ側の面接を受けるのがほとんどです。私も何度か受け入れのための面接に立ち会ったことがあります。その立ち合いの時に私も実際にこのBJシステムを使って授業をしていました。なぜか授業で熱心に勉強していた学生でない人が面接で選ばれる場合が多かったのです。私が面接に関わって思ったのは、面接で日本側の受けがいいのは、暗記力がある人だということです。日本語の読み書きができなくても暗記力があって要領の良い学生は面接に受かる可能性が高いということです。そして、一度面接に受かってしまうと、残念ながら勉強の意欲が落ちてしまうのです。それは、面接に受かることが目的になってしまっているからだと思います。

一方、日本の受け入れ側は、日本語の会話能力もそうでしょうが、真面目で、努力できる人を選びたいはずですが、でも残念ながら、今までの私の経験では、実際に面接に合格するのはその逆の要領の良い人が多いようです。私個人としては、コツコツ努力できる人に日本で働いてほしいし、そのような人なら、日本行ってから大きく成長するはずですが。

BJシステムの合格証書がそのコツコツ努力した人の証書・証拠そのものだと思っています。日本とインドネシアとの関係の中で、BJシステムを介し正直ものがバカを見ない、努力の成果が実る社会システムを実現していくことができればと心から願っています。



Proyek Revolusi Pembelajaran Bahasa Jepang

Setelah saya datang ke Indonesia pada tanggal 23 Oktober 1987, langsung diminta mengajar bahasa Jepang melalui teman. Yang pertama kali saya ajar adalah suatu kursus bahasa Jepang yang ada di Jakarta. Setelah itu, saya mengajar di UI dan Universitas Dharma Persada juga. Pada waktu itu, buku panduan untuk mengajar bahasa Jepang adalah “Nihongo Shoho”. Saya mengajar dengan buku tersebut. Namun karena unsur tata bahasanya tidak teratur, maka sulit mengajarkan dan sama sekali tidak senang untuk mengajar.

Pada waktu saya SMP, saya belajar bahasa Inggris melalui program radio NHK, “Bahasa Inggris dasar” dan “Bahasa Inggris dasar lanjutan”. Kurikulumnya sesuai buku pelajaran bahasa Inggris di SMP, yaitu berdasarkan tata bahasa bertahap-tahap. Dan cara latihannya menyenangkan seperti latihan ganti kata, dan latihan dialog dsb. Sehingga kemampuan bahasa Inggris meningkat terus. Sampai sampai guru bahasa Inggris di SMP menangis di depan mata saya bahwa “Saya tidak mengerti bagaimana caranya mengajar bahasa Inggris kepada OKU”. (Sebenarnya kalau suruh terjemahan lirik lagu Carpenters yang favorit saya, atau menunjuk buku cerita bahasa Inggris dan suruh baca saja, mungkin kemampuan bahasa Inggris saya akan meningkat.). Dengan demikian pada saat itu saya menjadi sombong mengenai bahasa Inggris. Pada waktu itu saya ikut ujian kemampuan bahasa Inggris grade 4. Namun pada hari ujian menjadi pusing, maka tidak lulus.

Kalau di SMA, karena sibuk kegiatan ekstrakurikuler, maka tidak melakukan persiapan belajar bahasa Inggris. Di tambah lagi, karena tertarik percakapan bahasa Inggris. Maka tidak latihan baca dan menulis sama sekali. Saya ikut ujian masuk universitas, jurusan sastra Inggris, karena ingin menjadi guru bahasa Inggris SMP. Namun karena nilai bahasa Inggrisnya tidak cukup, terpaksa dialihkan jurusan sosiologi yang ada di Fakultas Sastra sebagai mahasiswa cadangan. Oleh karena itulah sampai sekarang pun saya mempunyai suatu kompleks terhadap bahasa Inggris. Mengenai pembelajaran bahasa asing, saya punya latar belakang seperti itu.

Saya suka belajar. Dan suka mengajar juga. Oleh karena itulah, saya tidak bisa tahan mengajar bahasa Jepang dengan buku panduan yang sulit untuk diajarkan. Akhirnya mulai bikin buku pelajaran bahasa Jepang dengan sendiri.

Tahun 1991, saya pindah ke Universitas Gajahmada (UGM) dari Universitas Indonesia (UI). Karena saya ingin belajar bahasa Jawa. Pas waktu itu, datang suatu surat ke Jurusan bahasa Jepang UI dari Jurusan Bahasa Jepang UGM, bahwa “Karena membuat jurusan bahasa Jepang secara baru, maka minta kirim dosen bahasa Jepang dari Jurusan bahasa Jepang UI”. Dari seorang dosen jurusan bahasa Jepang UI yang akrab, membuat surat rekomendasi terhadap jurusan bahasa Jepang UGM bahwa “Rekomendasikan bapak OKU sebagai guru bahasa Jepang”. Dengan membawa surat itu, saya coba ke jurusan bahasa Jepang UGM. Dosen yang mengajar bahasa Jepang di situ, ternyata teman saya dari jurusan bahasa Jepang di Universitas Padjadjaran (UNPAD) Bandung. Mereka senang sekali karena bisa mengajar bahasa Jepang sama saya.

Setelah itu, dengan diajak dosen bahasa Jepang tersebut, saya ke jurusan Jepang UGM. Pas waktu itu mereka sedang berbicara sebagai pengajar untuk persiapan kuliah. “Hari ini akan mengajar apa?” “Akan mengajar mengenai “Iku (pergi)” dan “Kuru (datang)””. “Cara mengajarnya bagaimana...?” Ternyata mereka mengajar dengan menggunakan teori mengajar langsung (tanpa menggunakan bahasa Indonesia). Mengenai hal tersebut saya telah dengar dari teman saya yang belajar bahasa Jepang di UNPAD. Katanya tentang pola kalimat “...Jyanain jyanai”, bingung selama satu minggu antara guru bahasa Jepang orang Jepang yang tidak bisa bahasa Indonesia. Saya coba menjelaskan dengan menggunakan bahasa Indonesia. Ternyata dalam beberapa detik saja dia mengerti “Kok ternyata begitu



ya. Kita rugi waktu satu minggu hanya masalah begitu saja ya.” Karena ada kasus seperti itu, maka mengenai teori pembelajaran langsung, sampai sekarang pun saya merasa curiga. Mengenai teori tersebut, saya anggap bahwa “Teori terpaksa untuk mengajar di satu kelas yang bercampur murid yang berbagai macam bangsa dan yang mempunyai bahasa ibu berbagai macam.”

Kalau di Indonesia, walaupun belajar bahasa Jepang selama 4 tahun di jurusan bahasa Jepang universitas, kemampuannya bisa lulus ujian kemampuan bahasa Jepang N4 atau tidak sama sekali. N4 maksudnya kemampuan bahasa Jepang seperti anak orang Jepang kelas 3 SD. Walaupun lulus universitas, hanya bisa dapat kemampuan begitu saja. Sangat menyedihkan. Tapi anak-anak yang lulus, harus mencari tempat kerja. Di situ kebanyakan sarjana Jepang bernegosiasi antara Universitas dan SMA yang belum ada jurusan Jepang, dan membuat jurusan bahasa Jepang secara baru, dan bekerja sebagai guru bahasa Jepang. Oleh karena itu, mereka hanya bisa mengajar melalui buku pelajaran bahasa Jepang yang diri-sendiri telah belajar. Kalau sekarang hampir semua menggunakan “Minna no Nihongo” . Karena yang mengajar kemampuannya hanya N4 saja, maka tidak bisa berharap murid / mahasiswa lebih pintar dari itu. Dikatakan kalau di Indonesia jumlah orang yang sedang belajar bahasa Jepang, sangat banyak dibandingkan negara-negara yang lain. Namun latar belakangnya demikian.

Dulu saya pernah kerja sama dengan orang Thailand yang bisa bahasa Jepang. Kemampuan bahasa Jepangnya sama sekali tidak masalah untuk bekerja dengan menggunakan bahasa Jepang. Saya tanya ke dia, “Kalau lulus jurusan Jepang di Universitas yang di Thailand, kemampuannya seperti apa?” Jawabannya hampir semua N1 atau N2. Jika tanya “Pakai buku panduan seperti apa?”, dia bingung untuk jawab. Maka saya bilang “Kalau di Indonesia menggunakan ‘Nihongo kiso’”. “Oh maksudnya begitu ya. Kalau itu buku panduan itu untuk SMA.” Jawabnya. Memang begitu ya. Misalnya kalau belajar bahasa Indonesia di Universitas yang di Jepang, mungkin waktu pertama kali mungkin pakai semacam buku panduan, namun pada waktu kuliah, biasanya menggunakan surat kabar, majalah atau kesastraan bahasa Indonesia ya. Dengan mengetahui hal demikian, saya merasa sedih terhadap kondisi pembelajaran bahasa Jepang di Indonesia.

Ngomong-ngomong mari kita kembali ke cerita pada zaman Yogyakarta. Ceritanya sekitar tahun 1991. Akhirnya saya memutuskan untuk bikin buku pelajaran bahasa Jepang dengan serius. Karena 3 orang perempuan yang saya kenal di Wonogiri datang ke tempat saya di Yogya, saya mulai mengajar bahasa Jepang untuk mereka. Salah satu muridnya isteri saya sekarang. Maka sambil mengajar mereka saya bikin buku pelajaran bahasa Jepang. Yang didasarkan sistem adalah buku pelajaran bahasa Jepang SMP kelas 2 di Jepang. Di situ disimpulkan item-item tata bahasa Jepang dengan sederhana. “Taigen (kata yang tidak ada perubahan)”, “Yogen (kata yang ada perubahan)”, “shushikei (bentuk berhenti)”, “Renyokei (bentuk sambung ke kata yang ada perubahan)” “Rentaikei (kata yang sambung ke kata yang tidak ada perubahan)” dsb. Mungkin ada yang masih ingat istilah-istilah seperti itu. Berdasarkan seperti itu dan dikombinasikan kata bantu “te, ni, wo, wa”, membuat kurikulum yang bisa belajar bertahap-tahap. Dan dalam kurikulum tersebut, direkayasa agar bisa memahami Hiragana, Katakana dan Kanji sampai kelas 3 SD. Pas waktu itu ada perempuan yang ingin belajar bahasa Jepang di Yogya, dengan tambahan dia, bikin 1 kelas lagi. Mungkin waktu itu, belajarnya seminggu 4 kali, jamnya dari jam 13 sampai 14:30. Sebelum siang saya bikin bahan pelajaran untuk pelajaran hari itu, dan setelah siang mengajar di kelas lalu setelah mengajar dilanjutkan bikin bahan untuk pelajaran berikut. Dengan seperti itu, saya membuat buku pelajaran terus.

Setiap buku terdiri dari 7 pelajaran. Maka dalam 2 minggu selesaikan 1 buku. Buku 1 untuk mempelajari kata benda dan Hiragana. Mempelajari Hiragana yang digunakan



di pelajaran tersebut. Pelajaran 1 kalimat yang dipelajari adalah “だれのせんせい Dare no Sensee (guru siapa?). せんせいのいえ Sensee no ie (rumah guru).” Jika menggunakan Hiragana tersebut, bisa membuat beberapa kalimat seperti “のだせんせいのえ Noda sensee no e (Gambar guru Noda)” dsb. Dengan demikian setiap pelajaran menambah Hiragana dan sampai pelajaran 7, bisa menguasai semua Hiragana selain “Wo”. Dan akhirnya bisa menguasai pola kalimat “...no...wa...no...des.”

Buku 2 adalah perubahan kata “Suru”. Dalam tata bahasa Jepang, yang sulit adalah perubahan kata kerja umum. Maka hal tersebut di pindahkan ke buku nanti, sambil belajar perubahan kata “Suru”, menguasai kata bantu “Te, Ni, Wo, Wa” dan Katakana dan Kanji kelas 1 SD. Dengan buku 3, mempelajari kata sifat, penjelasan dan latihan-latihan mengenai “Rentai kei (bentuk sambung ke kata yang tidak ada perubahan)” “Renyō kei (bentuk sambung ke kata yang ada perubahan)” dsb. Dan dengan buku 4 baru mempelajari perubahan kata kerja umum. Karena mengenai penggunaan kata kerja secara umum di buku 2, maka kalau di buku 4, bisa konsentrasi untuk memahami perubahan kata kerja umum. Buku 5, adalah penjelasan dan latihan kata kerja bantu seperti “Reru, Rareru” dsb. Di Buku 6, membahas unsur-unsur tata bahasa dll., yang ada di ujian kemampuan bahasa Jepang N4, tapi belum di bahas sampai Buku 5, lalu melengkapi Kanji sampai kelas 3 SD di Jepang.

Bahasa Jepang adalah salah satu bahasa yang sangat sederhana. Itulah tanggapan saya. Yang bikin nuansa bahasa Jepang adalah bahasa sulit karena kosa kakanya terlalu banyak. Untuk menguasai kosa kata tersebut, diperlukan Hiragana, Katakana dan Kanji. Mungkin oleh karena itulah, hampir semua orang (termasuk orang Jepang), anggap bahasa Jepang itu sulit, dengan hanya melihat masalah kosa kata saja. Saya anggap demikian.

Pada waktu Zaman Jepang (Perang dunia ke dua), ada buku pelajaran bahasa Jepang yang dibikin oleh bala tentara Jepang. Saya telah menerbitkan buku revisi dari buku tersebut. Di situ menjelaskan tata bahasa Jepang hanya dalam 12 pelajaran saja. Tata bahasa Jepang begitu sederhana.

Sistem yang saya buat dinamakan BJ System. Dari Bahasa Jepang, dan karena nama Jawa saya Bedjo Judhistiro. Isteri saya mempelajari bahasa Jepang dengan sistem ini. Setelah itu menikah dan tinggal di Jakarta dan Depok (dekat UI). Pada waktu itu ada kursus bahasa Jepang menengah yang diserenggarakan The Japan Foundation. Untuk masuk kursus tersebut, harus lulus ujian. Ujian tersebut, mungkin levelnya seperti N4 sekarang. Ternyata isteri saya lulus ujian tersebut dan bisa belajar di kursus tersebut. Katanya teman sekelas di kursus tersebut adalah anak UI semester 4 sampai 7. Maksudnya orang yang belajar di BJ System selama 3 bulan dan orang yang belajar bahasa Jepang di UI selama 2, 3 tahun kira-kira levelnya sama. Dengan kondisi tersebut saya tambah yakin, dan saya bikin lembaga pendidikan bahasa Jepang “Bungka Juku”. Dan saya berharap bisa meningkatkan kemampuan bahasa Jepang di Indonesia selevel Thailand. Namun dunia ini tidak begitu enak / gampang.

Pertama-tama saya menggunakan BJ System di Universitas Dharma Persada. Agar tidak bisa nyontek, saya bikin soal ujian 10 macam lebih. Karena kuliah saya, muncul banyak mahasiswa yang tidak bisa lulus. Dan akhirnya pada waktu liburan panjang, dosen selain saya menangani kuliah saya dan luluskan semua mahasiswa. Dengan melihat kondisi tersebut, saya putus asa revolusi pendidikan bahasa Jepang di kuliah. Memang pada saat itu ada masalah izin kerja dan ada permintaan menjadi penerjemah untuk presiden direktur perusahaan Jepang dsb., juga.



Setelah itu, saya bikin PT sendiri, dan melalui PT tersebut saya usaha mengembangkan BJ System. Dan agar anak-anak yang belajar di BJ System, bisa baca bahasa Jepang, saya bikin majalah dwibahasa “Komunikasi IJ”, dan menerbitkan buku berdasarkan majalah tersebut.

Akan tetapi, menjadi jelas tantangan berikut. Ternyata tidak bisa membina guru yang bisa mengajar dengan BJ System. Karena seperti yang dicatat di atas, orang yang belajar bahasa Jepang di Indonesia hampir semua belajar bahasa Jepang melalui “Minna no Nihongo” saja. Saya berusaha mengajar dengan sendiri sebanyak mungkin. Namun dengan kondisi tersebut kelelahan saya menumpuk dan akhirnya kena jantung koroner. Dan harus istirahat di rumah. Selama istirahat di rumah sementara waktu saya mengajar dengan online, namun secara fisik menjadi agak sulit.

Pada waktu Covid-19, karena ada waktu, saya bikin video (YouTube). Namun yang telah selesai untuk buku 1 saja. Dan saya berfikir mengadakan kursus online untuk Buku 2 dan seterusnya. Namun kesempatan untuk itu, lama-lama tidak datang. Dan kali ini saya memutuskan, membuat kursus online umum, dan melaksanakannya. Yang hanya konsentrasi mengenai tata bahasa Jepang saja. Dan dengan timbang kondisi kesehatan saya, seminggu 1 kali dan 8 kali pertemuan saja.

Jika selesai kursus tersebut dan semua bisa upload ke YouTube, walaupun tidak ada saya, kapan pun, dimana pun siapa pun menjadi bisa belajar tata bahasa Jepang dengan BJ System. Jika menguasai sampai buku 4, bisa mengikuti latihan “Minna no Nihongo 1” tanpa guru. Dan jika menguasai sampai buku 5, bisa menguasai semua tata bahasa yang ada di “Minna no Nihongo 2”. Kursus tata bahasa kali ini, sampai buku 4 saja. Namun merencanakan untuk buku 5 setelah selesai sampai buku 4. Untuk selanjutnya, saya telah menyiapkan bahan kursus bahasa Jepang menengah online “Bahasa Jepang untuk Care Giver”. Tapi bagaimana pun, bahasa apa pun, cara meningkatkan kemampuan satu-satunya jalan adalah membaca. Oleh karena itulah setiap bulan saya menerbitkan majalah dwi bahasa “Komunikasi IJ”.

Setelah selesai kursus tersebut dan semua selesai upload ke YouTube, rencananya mengadakan ujian online. Ujian tersebut dilakukan per-Buku atau satu buku dibagi 2 bagian. Dan bagi yang lulus akan dibuatkan sertifikat.

Sekarang jika ingin bekerja di Jepang melalui “Ginou Jisyuu”, atau “Tokutei Ginou”, biasanya mengikuti wawancara dengan pihak penerima di Jepang. Saya sendiri pernah menyaksikan wawancara tersebut beberapa kali. Pada waktu itu, saya sedang mengajar bahasa Jepang dengan BJ System. Entah kenapa yang lulus wawancara, kebanyakan bukan anak yang belajar serius. Sambil menyaksikan wawancara, saya berfikir bahwa yang memberi kesan bagus adalah yang daya hafalnya tinggi. Walaupun tidak bisa baca dan menulis bahasa Jepang, anak yang daya hafalnya tinggi dan pintar rekayasa itulah senang diterima. Dan jika sekali lulus wawancara, sayangnya giat belajar menjadi turun. Mungkin karena tujuannya hanya lulus wawancara saja.

Sedangkan, pihak penerima di Jepang, memang menimbang kemampuan percakapan bahasa Jepang, mestinya ingin memilih anak yang jujur dan senantiasa bisa berusaha. Namun sayangnya secara nyata yang dipilih sebaliknya anak yang pintar rekayasa saja. Saya pribadi, anak yang bisa berusaha satu persatu itulah ingin dipekerjakan ke Jepang, dan kalau anak yang seperti itu, pasti berkembang pesat setelah ke Jepang.

Saya yakin, sertifikat BJ System itulah yang bisa sertifikasi / menjamin bahwa yang telah berusaha. Di antara hubungan Indonesia dan Jepang, dengan melalui BJ System, ingin mewujudkan sistem masyarakat yang orang jujur tidak akan rugi, dan berbuah hasil usaha sebenarnya.

**新ユートピア Dunia Impian**

インドネシアと日本とが協力すれば、今までにない素晴らしい世界が出来るのではないのでしょうか。
そういった観点から私の夢を広げていきたいと思えます。
Jika kerja sama dengan Indonesia dan Jepang, ada kemungkinan bisa menciptakan dunia bagus yang sebelumnya tidak ada.
Dengan dasar pikiran seperti itu, saya menerangkan impian saya.

ユートピア (68) 隣組と町内会

隣組や町内会が非常に機能的に活動しています。家族間のつながりが強く、様々な問題を大きくなる前に対処することができます。子供や親がいないような家庭でも地域が一つの大きな家族のような存在なので、何も問題がありません。一人一人が本当に幸せに暮らしています。季節ごとのお祭りや公民館といった地域の公共施設を通し、地域の人々が同じ家族のように生活しています。

以前、個人情報や個人の権利などを重要視しすぎたために核家族化が進みました。その結果、人間としての本来の生き方ができないようになってしまいました。そのため様々な犯罪が起きたりするようになってしまいました。

人間としての本来の幸せを考えた結果、現在のように地域を一つの家族として生活するようになったのです。

Dunia impian (68) RT dan RW

Aktif di kelompok RT dan RW secara efektif. Karena hubungan antara keluarganya kuat, dapat mengatasi masalah sebelum masalah tersebut menjadi besar. Walaupun ada keluarga yang tidak ada anak atau tidak ada orang tua, karena satu daerah seperti sebagai satu keluarga, sama sekali tidak ada masalah. Perorangan hidup dengan betul-betul bahagia. Melalui acara musiman (Matsuri) dan balai desa dsb., Orang-orang satu daerah hidup seperti sebagai satu keluarga.

Dulu, karena terlalu mementingkan data pribadi, hak pribadi dsb., makin banyak satu rumah hanya orang tua dan anak saja. Sehingga menjadi tidak bisa hidup sebagai manusia seutuhnya. Akhirnya terjadi berbagai kejahatan.

Memikirkan kebahagiaan seutuhnya sebagai manusia, ternyata menjadi hidup satu daerah sebagai satu keluarga.

ホームページアドレス広告募集
「こむにかし I J」を送付する際の送付状にホームページのアドレスと簡単な説明書きを付けてお送りします。説明書きは日本語とインドネシア語です。現在、8,000名以上の方に案内のメールをお送りしています。一件 38 万ルピア

Iklan Adress WebSite
Pada waktu mengirim "Komunikasi IJ", memasang adress WebSite anda dengan keterangan singkat, pada e-mail. Keterangan tersebut dipasang dalam bahasa Indonesia dan bahasa Jepang. Sekarang mengirim e-mail informasi, lebih dari 8.000 orang. Harga satu iklan: Rp.380.000-

**Let's Positiv Thinking**

世の中がよく見えるも悪く見えるも考え次第。自分の考え方をコントロールすることができれば、今までにない素晴らしい人生を送ることができます。
Kelihatan dunia ini, menjadi baik atau menjadi buruk, semua tergantung cara pikir sendiri.
Jika bisa kontrol cara pikir sendiri, bisa hidup dalam kehidupan yang bagus yang selama ini belum pernah dirasakan.

腑に落ちる

現在、情報化社会とされています。洪水のように様々な情報が流れてきます。更にフェイク・ニュースなどと言われ、どの情報を信じたら良いのかさえわからなくなってしまっているのではないのでしょうか。

私はそのような状況の中、「腑に落ちるかどうか」を一つの基準にしています。簡単にいうと「なるほどそうだったんだ」と思った情報を信じるようにしています。一般的に周りの気を引くことを目的とした情報は「腑に落ちる」ことはありません。利権が絡んだ情報も同様です。金だけ、自分だけ、今だけを目的にしたような情報です。特に「いいね」や「登録者数・再生回数」を目的にしたような情報は注意が必要です。

もう一つの基準は、天の意思に沿った情報かどうかです。自然の摂理に合った情報か。人間を幸せな方向に向かわせる情報かどうかです。

誰が何の目的で流している情報なのかを考えることを習慣づけることも大事です。

そのような基準を持って情報に接したり、情報を探したりするようにすれば、情報に惑わされることがなくなるように思うのですか、いかがでしょうか。

Masuk Akal

Zaman sekarang, dikatakan masyarakat berinformasi. Setiap saat mengalir berbagai informasi seperti banjir. Ditambah lagi ada masalah "Fake news", mungkin banyak orang bingung bahwa informasi mana yang bisa dipercaya.

Dalam kondisi demikian, saya sendiri bikin suatu standar bahwa "apakah masuk akal atau tidak." Jika ngomong sederhana, saya percaya informasi yang anggap "oh, ternyata begitu ya." Pada umumnya, kalau informasi untuk menarik perhatian saya, tidak akan merasa "masuk akal". Informasi yang menyangkut suatu kepentingan juga sama. Informasi seperti tujuannya hanya untuk uang saja, hanya untuk diri-sendiri saja, hanya untuk sekarang saja. Khususnya, kalau terhadap informasi yang tujuannya hanya menambah "like" atau "jumlah subscribe, jumlah tayangkan", harus hati-hati.

Standar satu lagi, adalah apakah informasi yang mengikuti keinginan Tuhan atau tidak. Apakah informasi yang cocok hukum alam atau tidak. Apakah informasi yang menuju ke kebahagiaan manusia atau tidak.

Penting juga, membiasakan berpikir, informasi tersebut siapa yang mengalirkan dengan tujuan apa?

Jika menghadapi atau mencari informasi berdasarkan standar seperti itu, mungkin tidak akan bingung terhadap informasi. Bagaimana?

**帰らなかった日本兵 Tentara Jepang yang tidak pulang ke negaranya**

1945年8月、日本は終戦を迎え、その後8月17日にインドネシアは独立宣言をしました。しかし、その後インドネシアはオランダとの独立戦争に突入します。インドネシアに駐留していた日本兵の中には日本に帰らずにインドネシアの若者と一緒にその独立戦争に参加した人たちがいます。そのいくつかの手記を歴史の事実としてここに残したいと思います。この手記は「福祉友の会」の会誌「月報」に掲載されたものです。インドネシアの方々にも知っていただきたいと思い、「福祉友の会」の了解を頂き、インドネシア語の訳と共に掲載します。訳の中で専門用語、地名等、お気づきの点がございましたら ISSI 事務所の方にご一報いただければ幸いです。

Tahun 1945, Agustus, Jepang telah kalah perang. Setelah itu dilakukan proklamasi di Indonesia. Namun demikian Indonesia memasuki perang kemerdekaan melawan Belanda. Di antara tentara Jepang yang waktu itu tinggal di Indonesia, ada yang ikut perang kemerdekaan tersebut tanpa pulang ke negeri sendiri. Kami ingin memperkenalkan beberapa catatan mereka. Catatan ini yang dimuat di "Geppo" buletin Yayasan Persahabatan. Supaya orang-orang Indonesia dapat mengetahui, kami muatkan di sini bersama terjemahan bahasa Indonesia. Dalam terjemahan jika ada yang salah seperti istilah atau nama tempat, tolong diberitahukan ke kantor ISSI.

母 (2)

其の年の6月頃、故国の母に手紙を書いた。連絡とれるかどうか案じて居たが、母から返事が来た。“憲喜が無事帰国する日の一日も早い事を、朝夕神佛に祈っている”と、書いてあった。又、“来る日も来る日も陰膳を据えて無事を祈っている。母の元気なうちに帰って来てほしい”とも書かれていた。去る正月には憲喜の為に特別のお供え餅迄準備した由であり、手紙に同封しておくった憲喜のまだ若く、肥えていた写真に、泣いて喜んだ母の姿が浮かび出てくる様な文面であった。“親想う心に勝る親心”母の喜びが直接(ジカ)に伝わって来て、あとからあとから涙があふれて憲喜の頬を濡らした。

1952年、日本政府の費用負担による残留日系人引き揚げ希望者の第1回帰国が決まり、5月に出発する事になった。出発に先立ち、シャンハイ・ストラートの収容所で近藤兄外20名の帰国者の送別会が催された。田上も船の出るベラワン港迄帰国者を見送ったが、その中に同郷熊本出身の山田兄が居る事を、手紙で母に知らせてやった。其の母から返信が来た。帰国した山田兄を訪ねて憲喜の詳細を聞いたと書かれていた。“衣服の事など心配するな。帰国したら姉さんが買ってやる。金の事も同様だ。食べる事に心配はいらない。お母さんはお前の嫁迄探し既に約束も出来ている。帰国時は、何月何日、何処に到着すると事前に手紙をくれれば、東京でも大阪でもお母さんと姉さんが出迎えに行く。何も心配する事はない。一日も早く帰って来てほしい”と言う主旨であった。

1953年には同部隊出身の河村兄がシャンハイ・ストラートの収容所から帰国した。勿論、前回同様、故国への引き揚げであった。田上も次ぎの機会には帰国する事を期し、衣服等の準備を始めた。思いたったからには今度こそ必ず帰ろうと自分に言い聞かせ、“お母さん待っていて下さい”と心の中で母に呼びかけた。母の笑顔が脳裏に浮かんだ。



Ibu (2)

Sekitar Juni tahun itu, saya menulis surat kepada ibu yang di Jepang. Saya agak ragu-ragu apakah betul-betul sampai. Tapi ternyata ada balasan dari ibu. Ditulis “Saya setiap pagi hari dan malam berdoa supaya Noriyoshi pulang ke Jepang secepatnya”. Dan ditulis juga “Setiap hari menyediakan tempat makan, berdoa keselamatan. Tolong pulang selama masih ibunya sehat”. Katanya tahun baru kemarin, menyediakan kue MOCHI khusus untuk Noriyoshi, dan kayaknya dia senang sekali dan sampai-sampai mengeluarkan air mata dengan melihat foto Noriyoshi yang masih muda dan agak gemuk. Betul-betul terasa hati sayang ibu yang “hati sayang orang tua yang lebih besar daripada hati sayang yang memikirkan orang tua”, dan keluar air mata terus-menerus membasahi pipi Noriyoshi (saya sendiri).

Pada tahun 1952, telah dipastikan jadwal pulang ke Jepang bagi orang Jepang yang tertinggal di Indonesia, dengan biaya pemerintah Jepang. Rencana keberangkatannya. Mei. Sebelum berangkat, diadakan pesta perpisahan terhadap orang-orang yang pulang ke Jepang sebanyak 20 orang, diantaranya ada kakak Kondo, di tempat penampungan Shanghai Street. Tagami sendiri juga mengantarkan sampai pelabuhan Belawan yang mana tempat kapalnya berangkat. Dan saya beritahukan ke ibu, bahwa diantaranya ada kakak Yamada yang berasal dari daerah Kumamoto, satu daerah dengan saya. Dari ibu itu, dapat balasan. Katanya mengunjungi kakak Yamada yang telah pulang ke Jepang, dan menanyakan kondisi Noriyoshi secara detail. Isi suratnya “Tidak usah khawatir masalah pakaian dsb. Setelah pulang ke Jepang, kakak perempuannya akan belikan. Masalah uang pun sama. Masalah makan juga tidak usah khawatir. Ibu telah mencari pasangan kamu dan sudah ada janjinya. Pada waktu pulang, kalau dapat surat sebelumnya, seperti tanggal berapa, bulan berapa sampai di mana, walaupun Tokyo, walaupun Osaka, ibu dan kakak perempuan akan jemput. Tidak usah khawatir apa pun. Tolong pulang secepatnya.”

Pada tahun 1953, kakak Kawamura yang se-kesatuan, pulang ke Jepang dari penampungan Shanghai Street. Tentu saja seperti sebelumnya, pulang ke negara sendiri. Tagami sendiri dengan harapan berikutnya saya juga pulang, mulai membereskan pakaian dsb. Kalau sudah mulai berharap, pasti nanti pulang, begitu mengatakan pada diri-sendiri, dan meneriakkan di dalam hati bahwa “ibu tunggu aku”. Saya bayangkan senyum muka ibu.

**松下幸之助の言葉 Kata-kata Matsushita Konosuke**

Konosuke Matsushita

Tokoh besar manajemen Jepang. Banyak orang memanggil beliau sebagai “Dewa Manajemen”.

Sebelum perang dunia ke II, beliau mendirikan “Matsushita Elektrik” dengan 3 orang (bersama isteri dan adik isteri) saja. Dan sekarang “Matsushita Elektrik” tersebut dikenal sebagai “Panasonic”.

Setelah Perang dunia ke II, beliau mendirikan lembaga penelitian PHP (PEACE and HAPPINESS through PROSPERITY) dengan tujuan mencari kebahagiaan manusia dalam segi batiniah.

逆境をチャンスに変える言葉 7

一度転んで気がつかなければ、
七度転んでも同じこと。
一度で気のつく人間になりたい。

「失敗は成功の母」といいますが、それはどんな失敗からでも貪欲に何かを学び取ろうとすればこそでしょう。学ぼうという熱意がない人にとっては、何度失敗しても同じこと。失敗が成功の糧になることもありません。

PHP 研究所、大江弘 編著 「[松下幸之助] 強運を引き寄せる言葉」より

Kata-kata yang merubah kesulitan (Pinch) ke kesempatan (Chance) 7

Sekali jatuh tapi tidak sadar,
Walaupun 7 kali jatuh sama saja.
Ingin menjadi manusia yang bisa sadar dengan 1 kali saja pun.

Ada kata “kegagalan adalah ibu dari kesuksesan.” Akan tetapi karena ada keinginan untuk mempelajari dari kegagalan apa pun. Bagi orang yang tidak ada keinginan belajar, walaupun gagal berapa kali pun, sama saja. Kegagalan tidak akan menjadi pupuk untuk kesuksesan.

Dari buku “[Matsushita Konosuke] kata-kata yang menarik keuntungan besar”
Penulis / Penyusun Ooe Hiroshi, Penerbit PHP Research Institute. Inc.

広告募集のお知らせ Penerimaan Pemasangan Iklan

「こむにかし I J」誌上に掲載する広告を募集しています。詳しくは、PT.ISSI 事務所までお問い合わせください。
Kami sedang menerima pemasangan iklan di "Komunikasi IJ". Informasi selanjutnya silahkan hubungi PT.ISSI.



宮澤賢治の童話から Dari Dongeng Miyazawa Kenji

Miyazawa Kenji adalah penulis dongeng legendaris di Jepang. Dari dongeng dia, kita bisa mempelajari bermacam-macam hal. Maka kami sengaja memuat dongeng dia disertai terjemahan bahasa Indonesianya.

山男の四月 (2)

(やられた、畜生《ちくしょう》、とうとうやられた、さっきからあんまり爪が尖ってあやしいとおもっていた。畜生、すっかりうまくだまされた。) 山男は口惜《くや》しがってばたばたしようと思いました。もうただ一箱の小さな六神丸ですからどうにもしかたありませんでした。

ところが支那人のほうは大よろこびです。ひよいひよいと両脚をかわるがわるあげてとびあがり、ぽんぽんと手で足のうらをたたきました。その音はつづみのように、野原の遠くのほうまでひびきました。

それから支那人の大きな手が、いきなり山男の眼の前にでてきたとおもうと、山男はふらふらと高いところにのぼり、まもなく荷物のあの紙箱の間におろされました。

おやおやおもっているうちに上からぱたっと行李の蓋が落ちてきました。それでも日光は行李の目からうつくすきとおって見えました。

(とうとう※ [# 「穴かんむり／牛」、第4水準2-83-13]《ろう》におれははいった。それでもやっぱり、お日さまは外で照っている。) 山男はひとりでこんなことを呟《つぶ》やいて無理にかなしいのをごまかそうとしました。するとこんどは、急にもっとくらくらくなりました。

Bulan April laki-laki gunung (2)

(Waduh! Kena! Akhirnya kena juga. Dari tadi saya curiga, karena kukunya tajam sekali. Waduh! Akhirnya dibohongi benar-benar.). Laki-laki gunung merasa kesal dan ingin ngamuk, namun karena hanya Rokushingan (obat bulat) 1 kotak kecil saja, tidak bisa apa-apa.

Namun demikian, malah si orang Cina merasa senang sekali. Dia lompat-lompat dengan gantian kaki kiri kanan, dan dia memukul telapak kaki dengan telapak tangan. Suara tersebut bergema sampai jauh di padang rumput seperti gendang.

Setelah itu, kelihatannya muncul tangan besar orang Cina di depan mata laki-laki gunung, tiba-tiba laki-laki gunung naik ke atas langit tinggi-tinggi, setelah itu diturunkan ke antara kotak kertas itu yang ada barang.

Dia berfikir ini kenapa? Ternyata dari atas jatuh tutupan kotak anyaman bambu. Walaupun begitu kelihatan sinar matahari dari sela-sela anyaman bambu.

(Akhirnya saya dikurung penjara. Walaupun begitu sang matahari bersinar di luar.). Laki-laki gunung ngomong sendiri seperti begini, demi menghilangkan rasa kesedihan. Dan kemudian tiba-tiba menjadi lebih gelap lagi.

(Hohooo, kayaknya memasang kain bungkus ya. Waduh, benar-benar menjadi kondisi gawat.



(ははあ、風呂敷《ふろしき》をかけたな。いよいよ情けないことになった。これから暗い旅になる。) 山男はなるべく落ち着いてこう言いました。

すると愕《おど》ろいたことは山男のすぐ横でものを言うやつがあるのです。「おまえさんはどこから来なすったね。」

山男ははじめぎくっとしましたが、すぐ、

(ははあ、六神丸というものは、みんなおれのようなぐあい人間が薬で改良されたもんだな。よしよし、) と考えて、

「おれは魚屋の前から来た。」と腹に力を入れて答えました。すると外から支那人が囁《か》みつくようにどなりました。

「声あまり高い。しずかにするよろしい。」

山男はさっきから、支那人がむやみにしゃくにさわっていましたので、このときはもう一ぺんにかっとしてしまいました。

「何だと。何をぬかしやがるんだ。どろぼうめ。きさまが町へはいったら、おれはすぐ、この支那人はあやしいやつだどどなってやる。さあどうだ。」

支那人は、外でしんとしてしまいました。じつにしばらくの間、しいんとしていました。山男はこれは支那人が、両手を胸で重ねて泣いているのかなともおもいました。そうしてみると、いままで峠《とうげ》や林のなかで、荷物をおろしてなにかひどく考え込《こ》んでいたような支那人は、みんなこんなことを誰《たれ》かに云《い》われたのだなと考えました。山男はもうすっかりかあいそうになって、

Sekarang mulai perjalanan yang gelap.). Laki-laki gunung ngomong begitu dengan tenang.

Ternyata ajaibnya ada sesuatu yang ngomonog persis di sebelah laki-laki gunung.

“Kamu datang dari mana?”

Laki-laki gunung, pertama-tama menjadi kaget, namun langsung,

(Hahaa, namanya obat Rokushingan, semua dijelmakan manusia seperti saya dengan obat ya. Kalau begitu boleh.). Dia memikirkan seperti itu, dan.

“Aku datang dari depan toko ikan.” Menjawab dengan memberi daya ke perut. Dengan begitu, dari luar orang Cina teriak seperti akan menggigit.

“Suara terlalu besar. Diam”

Karena laki-laki gunung dari tadi merasa tidak enak terhadap orang Cina, maka waktu itu langsung menjadi marah.

“Apaan! Ngomong apa! Si pencuri! Kalau kamu masuk kota, saya langsung teriak bahwa orang Cina ini bahaya! Ayo bagaimana!”

Orang Cina menjadi diam di luar. Sementara waktu, betul-betul menjadi sunyi. Laki-laki gunung berpikir, mungkin orang Cina sedang menangis dengan memegang dada dengan kedua tangan. Pikir-pikir, sampai sekarang di jalan puncak dan dalam hutan, orang Cina yang kelihatan memikirkan sesuatu sambil menurunkan barang, mungkin dikatakan oleh dari entah siapa. Laki-laki gunung memikirkan seperti itu. Laki-laki gunung malah merasa kasihan kepada orang Cina. Dan hendak



いまのはうそだよと云おうとしていましたら、外の支那人があわれなしわがれた声で言いました。

「それ、あまり同情ない。わたし商売たない。わたしおまんまたべない。わたし往生する、それ、あまり同情ない。」山男はもう支那人が、あんまり気の毒になってしまって、おれのからだなどは、支那人が六十銭もうけて宿屋に行って、鰯《いわし》の頭や菜っ葉汁《じる》をたべるかわりにくれてやろうと思いつつながら答えました。

「支那人さん、もういいよ。そんなに泣かなくてもいいよ。おれは町にはいったら、あまり声を出さないようにしよう。安心しな。」すると外の支那人は、やっと胸をなでおろしたらしく、ほおという息の声も、ぽんぽんと足を叩《たた》いている音も聞こえました。それから支那人は、荷物をしょったらしく、葉の紙箱は、互《たがい》にがたがたぶっかかりました。

ngomong yang tadi bohong saja. Orang Cina di luar ngomong dengan suara serak kasihan.

“Tidak usah kasihani saya. Saya tidak bisa dagang lagi. Menjadi tidak bisa makan. Saya akan mengalami kesulitan. Tidak usah kasihani saya.” Laki-laki gunung betul-betul menjadi merasa kasihan ke orang Cina, menjawab dengan memikirkan bahwa, kalau badan saya memberi kepada orang Cina, agar orang Cina mendapat keuntungan sebanyak 60 sen, lalu pergi ke penginapan dan makan kepala ikan sardin dan kuah sayur.

“Bapak orang Cina, ya sudahlah. Tidak usah menangis seperti itu. Saya begitu masuk kota, saya berusaha tidak begitu mengeluarkan suara. Tenang saja.” Dengan begitu orang Cina kelihatannya mulai menjadi tenang, terdengar suara nafas Hoo, dan terdengar juga suara memukul kaki Pon Pon juga. Setelah itu, orang Cina kelihatannya angkat barang, dan kotak kertas obat saling menabrak.

編集後記 Dari Redaksi

レバランの長期休暇終了後、計画通り 4 月 26 日からオンラインによる日本語基礎文法のコースを始めます。このコースを通しインドネシアが発展することを願っています。詳しくは「ガドガド」の「日本語教育改革プロジェクト」をお読みください。

Setelah selesai liburan panjang Lebaran, sesuai rencana, akan mulai kursus online tata bahasa Jepang. Kami berharap melalui kursus tersebut Indonesia akan berkembang. Detailnya tolong membaca “Proyek revolusi Pembelajaran Bahasa Jepang” yang ada di “Gado-gado”.

(Bedjo)



インダストリアル・サポート・サービス・インドネシア (ISSI)
翻訳・通訳サービスのご案内 (2024年10月)

インダストリアル・サポート・サービス・インドネシア (ISSI) では、
以下のような翻訳・通訳サービスを行っています。どうぞご利用ください。

日本・インドネシアの大学院を卒業したインドネシア・日本人が担当いたします。

通訳サービス

- 料金：半日（4時間まで） 2万5千円
一日（8時間まで） 4万円

（オーバータイム6千円/時）

日数が多い場合は別途交渉可能

翻訳サービス（日本語ーインドネシア語）

- 今まで多くの技術関係、法律関係の翻訳を手がけています。どうぞ安心してご利用ください。
- 料金
 - 一般 1ページ 2千5百円
 - 技術・法律 1ページ 3千5百円
 - 1ページ（日本語400字、インドネシア語150単語）
 - ページ数が多い場合は別途交渉可能
- 翻訳の納品および支払い方法
 - 基本的に翻訳物のやり取りは電子メールもしくはSNS（WhatsApp）、現物などで行います。
 - 元原稿をベースにお見積りいたします。
 - 支払いは翻訳が出来上がった時点で完成した翻訳と共に請求書をお送りしますのでISSIの銀行口座にお振込みください。

お問い合わせ先

PT. インダストリアル・サポート・サービス・インドネシア (PT. ISSI)

Tel: 021-8990-9861 WA: 0813-1128-8312

（月 - 金、9:00-17:00、日本語のできるスタッフが対応します）

E-mail: oku@issi.co.id achmad.suryaabdi@issi.co.id indah@issi.co.id

携帯：0812-8057-1062(奥信行) 0813-1712-2419(スルヤ)

0858-8105-7772 (インダ)



広告 Iklan

報連相セミナーのご案内

社内のコミュニケーション、特に日本人の上司と現地社員とのコミュニケーションのことで悩んでいる会社が多いと思います。確かに言葉の問題、そして文化の違いなどもその原因にあると思います。しかし、言葉や文化の違いのせいにばかりすることで社員一人ひとりの能力を発揮することができないとしたら、それはとてももったいないことです。

最近、世界中で「報連相」という考え方が広まってきています。これは「報告」「連絡」「相談」を略したもので、特に社内においていかにコミュニケーションをスムーズに行うようにするかという考え方です。

この「報連相」を学ぶことにより、社内におけるコミュニケーションの重要性を再確認することができます。また、PT. ISSIの「報連相」セミナーでは「会社で仕事をするこの意味」から、「生きるこの意味」といったことまで触れ、社員一人ひとりの仕事に対する意気込みを変えたいお手伝いをしています。

更には具体的な報連相のツールも簡単にご紹介していますので、社内における作業効率の改善にもお役に立つと思います。

PT. ISSIでは「報連相セミナー」と共に「真・報連相セミナー(情報によるマネジメント)」も行っております。「報連相セミナー」終了後に合わせてご利用いただければより一層の効果が上がると思います。

セミナーの主な内容

- 日本企業発展の秘密
- 管理者の能力とは何か
- 生きる意味
- 「情報」に関するいくつかの考え方
- 「報告」「連絡」「相談」の説明
- 「お客様の苦情は会社の宝」
- ケーススタディ
- 「報告」「連絡」に関するいくつかのツールの紹介
- 二日セミナーの場合、二日目は日本報連相センターからの教材を使って報連相の質を更に深めます。

受講料

インハウス・トレーニング

お客様の工場・事務所に出席のセミナー

(参加者数は自由)

一日セミナー Rp.9,800,000- (九百八十万ルピア)
二日セミナー Rp.18,900,000- (千八百九十万ルピア)

インハウス・トレーニング・イン・ISSI

ISSIのセミナールームを利用したインハウス・トレーニング

(定員 24 名)

一日セミナー Rp.9,800,000- (九百八十万ルピア)
二日セミナー Rp.18,900,000- (千八百九十万ルピア)

※食事、スナック込み

※ 上記料金は全て税別です。

Seminar "HORENSO"

Mungkin ada banyak perusahaan yang sedang mengalami kesulitan tentang komunikasi di dalam perusahaan, khususnya antara atasan orang Jepang dan staff lokal. Memang perbedaan bahasa dan budaya menjadi salah satu penyebab. Akan tetapi karena meng-kambing-hitam-kan perbedaan bahasa dan budaya sehingga kalau tidak bisa memanfaatkan kemampuan karyawan masing-masing, hal itu amat sangat disayangkan.

Saat ini, sedang tersebar teori "HORENSO" di seluruh dunia. "HORENSO" adalah singkatan dari "HOUKOKU (Pelaporan)", "RENRAKU (Informasikan)" dan "Soudan (Konsultasi)", dan teori untuk melancarkan komunikasi di dalam perusahaan.

Dengan mempelajari "HORENSO" ini, dapat disadari kembali bagaimana pentingnya komunikasi di dalam perusahaan. Dan dengan seminar "HORENSO" di PT. ISSI, sampai menyinggung "kenapa kita bekerja di dalam perusahaan" sampai "kenapa kita hidup", maka bisa membantu meningkatkan semangat kerja karyawan masing-masing.

Selain itu, kami mengenalkan beberapa tool HORENSO secara nyata, maka dapat digunakan untuk memperbaiki (KAIZEN) efisiensi pekerjaan di dalam kantor.

Kami PT. ISSI, selain "Seminar HORENSO", menyediakan pula "Seminar SHIN-HORENSO (Managemen melalui informasi)". Jika dipergunakannya setelah selesai "Seminar HORENSO", efisiensinya dapat lebih ditingkatkan.

Isi Seminar

- Rahasia kemajuan perusahaan Jepang
- Kemampuan sebagai manager itu apa?
- Arti hidup
- Beberapa pikiran tentang "Informasi"
- Penjelasan mengenai "HOUKOKU", "RENRAKU" dan "Soudan"
- "Claim adalah harta perusahaan"
- Studi Kasus
- Mengenalkan beberapa tool yang ada kaitan "HOUKOKU" dan "RENRAKU"
- Jika seminar 2 hari, hari yang ke 2 meningkatkan mutu HORENSO, dengan menggunakan bahan dari Pusat HORENSO Jepang.

Biaya training

In House Training

Seminar yang dilakukan di tempat client (jumlah pesertanya bebas)

1 hari seminar Rp.9.800.000-
(Sembilan Juta Delapan Ratus Ribu Rupiah)
2 hari seminar Rp.18.900.000-
(Delapan Belas Juta Sembilan Ratus Ribu Rupiah)

In House Training in ISSI

In House Training yang menggunakan ruang seminar ISSI

(max. 24 orang)

1 hari seminar Rp.9.800.000-
(Sembilan Juta Delapan Ratus Ribu Rupiah)
2 hari seminar Rp.18.900.000-
(Delapan Belas Juta Sembilan Ratus Ribu Rupiah)

※ Ongkos jasa di atas semua tidak termasuk pajak (PPH 23).



PT. インダストリアル・サポート・サービス (PT. ISSI) が目指すもの

インドネシアは世界に誇る素晴らしい国です。自然環境、文化そして地下資源に至るまで全て揃っています。本当に豊かな国です。その証拠にオランダは350年にわたる植民地化で自分の国を大きくしました。現在はアメリカが同じようにインドネシアの豊かさによって自分の国を繁栄させています。もし、インドネシアが貧しい国だとしたら、だれがインドネシアを植民地化しようとするのでしょうか。

しかし、インドネシアがオランダやアメリカに搾取されているのは事実です。どうして搾取されし続けているのでしょうか。一般的にある国をコントロールしようとする場合、経済封鎖を使います。しかし、インドネシアは経済封鎖をされてもほとんど全ての資源が国内にあるので、ほとんど問題はありませぬ。では、どうして搾取されているのでしょうか。それは国力が足りないからです。国力とは何でしょう。それは人です。国民です。国民一人一人の能力。それがそのまま国力になると思います。

人の能力とは一体なんなのでしょうか。それはものを考える力だと思っています。そして、ものを考える力は読書により培われると思っています。

私は以前、本の販売部数をベースに日本とインドネシアの読書量の違いを調べました。国民一人当たり、一年間に何冊の本を購入しているかというものです。そこで出てきた数字はインドネシアが0.3冊、日本が5.9冊というものでした。それを国力としてみると、なんとインドネシアの国力は日本の20分の1ということになります。これが現実です。この状態でどうしてインドネシアを搾取の危機から守ることができるのでしょうか。

私がPT. ISSIを立ち上げた一つの目的はそこにあります。インドネシアの読書率を引き上げるためにできることをしたい。そういった思いです。

設立当初から続けているのはインドネシア語と日本語によるバイリンガルマガジンの発行です。本屋さんで本を買うお金がなくても、読みたいものがなくても、無料で読み物を手に入れることができます。なるべく質の良い本や、素晴らしい方々の書き物をご紹介しますようにしています。そして、書き溜めたものを少しずつ書籍化しています。

それから、日本語教育です。一般の日本語教育では会話中心のものがほとんどですが、PT ISSIでは、独自に開発した教材で、読み書きを中心とした日本語教育を行っています。それは、インドネシア語の良い書籍がなくても、日本語で読むことができれば、世界中のさまざまなものを読むことができるからです。

百田尚樹の「日本国紀」に次のような一節があります。「また日本は欧米の書物を数多く翻訳したことにより、日本語で世界中の本が読める特異な国となった。おそらく当時たった一つの言語で、世界の社会科学や自然科学の本だけでなく、古今東西の文学を読めた国は日本だけであったと思われる。同時代の中国人や朝鮮人、それに東南アジアのインテリたちが、懸命に日本語を学んだ理由はここにもあった。当時、日本語こそ、東アジアで最高の国際言語であったのだ。」(百田尚樹「日本国紀」332ページ、株式会社幻冬舎)

PT ISSIでは「私たちは企業は理想的な教育機関であると考えています」をスローガンに企業教育に力を入れています。中身のあるわかりやすい教材をインドネシア語に訳してのトレーニング。コンサルタント。そして翻訳、通訳を通し、企業研修のお手伝いをしていきます。

微力ではありますが、インドネシアの発展のためにできることを続けていきたいと思っています。私は、インドネシアと日本が一つになることを夢見ています。インドネシアと日本が一つになれば、全てのものが揃います。そして、その力を持ってすれば世界平和も夢ではありません。



Visi dan Misi PT. Industrial Support Services Indonesia (PT. ISSI)

Negara Indonesia adalah negara yang bagus yang bisa dibanggakan pada seluruh dunia. Segara hal lengkap seperti lingkungan alam, budaya sampai sumber daya mineral (bawah tanah). Buktinya Belanda menjajah selama 350 tahun dan membesarkan negara sendiri. Kalau sekarang Amerika juga memakmurkan negara sendiri dengan kekayaan Indonesia. Seandainya kalau Indonesia negara miskin, siapa yang ingin menjajah Indonesia?

Namun Indonesia secara nyata dieksploitasi oleh Belanda dan Amerika. Kenapa dieksploitasi terus? Pada umumnya jika ingin kontrol suatu negara, menggunakan cara embargo. Akan tetapi kalau Indonesia, karena hampir semua sumber daya ada di dalam negeri, hampir tidak ada masalah. Kalau begitu kenapa dieksploitasi. Karena kekuatan negaranya kurang. Kekuatan negara itu apa? Iyalah manusia. Rakyat. Kemampuan rakyat satu orang satu orang. Itulah langsung menjadi kekuatan negara.

Kalau begitu kemampuan manusia itu apa? Menurut saya, daya berpikir. Dan saya anggap daya berpikir tersebut dapat dikembangkan dengan baca buku.

Saya dulu pernah mencari perbedaan minat baca buku antara Indonesia dan Jepang, berdasarkan jumlah penjualan buku. Saya hitung rata-rata satu orang beli berapa buku dalam 1 tahun. Dan saya dapat angka, iyalah Indonesia 0,3 buku dan Jepang 5,9 buku. Jika angka itu dianggap sebagai kekuatan negara, ternyata kekuatan negara di Indonesia menjadi 1 per 20 dibandingkan Jepang. Inilah kenyataan. Dengan kondisi seperti ini, bagaimana bisa amankan Indonesia dari ancaman eksploitasi?

Kenapa saya mendirikan PT. ISSI, salah satu tujuannya ada di situ. Supaya meningkatkan minat baca di Indonesia, ingin melakukan apa yang bisa dilakukan. Itulah keinginan saya.

Sejak didirikan yang dilanjutkan adalah menerbitkan majalah dwi bahasa antara bahasa Indonesia dan bahasa Jepang. Walaupun tidak ada dana untuk beli buku di toko buku, walaupun tidak ada yang ingin baca, dapat bacaan dengan gratis. Saya berusaha memperkenalkan buku bermutu dan tulisan yang ditulis oleh orang bermutu. Dan yang telah ditumpuk di majalah dijadikan buku sedikit demi sedikit.

Kemudian pelajaran bahasa Jepang. Kalau pelajaran bahasa Jepang umum, hampir semua berdasarkan percakapan. Namun kalau di PT. ISSI menggunakan bahan pelajaran yang dikembangkan secara khusus. Bahan tersebut berdasarkan baca dan menulis. Karena walaupun di Indonesia tidak ada buku yang bagus, jika bisa baca dengan bahasa Jepang, bisa baca berbagai buku dalam dunia.

Naoki Hyakuta menulis sebagai berikut dalam buku "Catatan negara Jepang". "Dan kalau Jepang, karena telah diterjemahkan buku Barat banyak sekali, menjadi negara yang unik yang mana bisa baca buku seluruh dunia dengan bahasa Jepang. Ada kemungkinan pada waktu itu, dengan satu bahasa bisa baca buku bukan hanya ilmu pengetahuan sosial dan ilmu pengetahuan alam dunia saja, namun sastra seluruh dunia, hanya Jepang saja. Orang China orang Korea dan ilmuwan Asia Tenggara belajar bahasa Jepang dengan mati-matian, alasannya ada di situ. Pada waktu itu, bahasa Jepang lah bahasa internasional yang paling tinggi dalam Asia Timur." (Naoki Hyakuta "Catatan negara Jepang" hal. 332, PT. Gentousha)

PT. ISSI mentitik beratkan pendidikan dalam perusahaan dengan semboyan "Kami anggap perusahaan adalah lembaga pendidikan yang paling ideal." Training dengan terjemahkan pada bahasa Indonesia dari bahan pelajaran yang bermutu dan mudah dimengerti. Konsultan. Dan melalui terjemahan baik tulisan maupun lisan, membantu training / pendidikan dalam perusahaan.

Apa yang bisa dilakukan hanya sedikit saja, namun ingin melanjutkan apa yang bisa dilakukan demi kemajuan Indonesia. Saya bermimpi Indonesia dan Jepang akan menyatu. Jika Indonesia dan Jepang menjadi satu, semua menjadi lengkap. Dan jika menggunakan daya tersebut, dapat mewujudkan perdamaian dunia.